

『ステイホーム』で出会った一冊

東京都国立市 橋爪 京子

コロナウイルス感染拡大のため、2月末より、私たち「くにたちお話の会」では、予定していたほとんどの活動が中止となりました。図書館施設での子どものお話会、学校でのお話会、さらには大人のためのお話会、学習会などなど。当初はそれほど長引くとは思わなかったので、中止ではなく延期と考えていたのですが、中止にせざるをえませんでした。図書館は休館、学校も休校となり、ステイホームが叫ばれる毎日となりました。

お話の勉強を始めて30年近くになりますが、こんなに家にばかりいて時間がある生活は初めてのこと。それなら新しいお話の一つも覚えればいいのにと自分でも思うのですが、目標がはっきりしないせいか集中が続きません。「だめだなー、私って」と情けなく思いながら、それでも私は、この「家にいなければならない時間」を過ごすのがつらくありませんでした。「本が読める！」からでした。

図書館が休館になってしまったのが残念でしたが、いつか読もうと積んでおいた本や再読したかった本を気の向くままに手にとりました。メモもとらず気ままな読書なので忘れてしまった部分もありますが、今の時期にピッタリと印象に残ったのが『夢見る帝国図書館』中島京子著（文藝春秋）でした。



喜和子さんという風変わりな年配の女性と作家の「わたし」が、喜和子さんの数奇な人生をたどりながら、その合間に帝国図書館の成り立ちや現在の「国際子ども図書館」になるまでの歴史が語られます。震災、戦災をくぐりぬけ次々に襲いかかる困難に、何とか図書館を守ろうとした各時代の館員たちの奮闘や、芥川龍之介、宮沢賢治、樋口一葉などの作家が図書館の資料をどんなに活用したかも描かれます。喜和さんは幼い頃、戦後の上野のバラックで「お兄さん」と呼ぶ男性（絵本作家だったらしい）と暮らしたことがあったのですが、その「お兄さん」が見せてくれた1冊の絵本も、現在の「国際子ども図書館」で見つかったりもするのです。図書館の大切さを実感させてくれる図書館愛に満ちた作品です。

休校でステイホームの子どもたちにとって最も本が必要な時に、図書館が休館だなんて何て残念なことだったでしょう。子どもだけでなく大人にとっても、生きていくためには「食料」だけでなく「本」も必要と言いたいです。

さて、「家にいなければならない時間」がつらくなかったといっても、それも期限があるからこそ。6月から図書館も開館し、学校も始まりそうです。子どもたちが学校生活を無理なく安全に過ごせますように。これから子どもたちにどんな形でお話が届けられるのか、みんなで考えていかなければと思います。

2020年 5月28日